HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学法学会記事
Citation	北大法学論集, 69(1), 75-77
Issue Date	2018-05-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/70615
Type	other
File Information	lawreview_vol69no1_05.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

雑　報

北海道大学法学会記事

〇二〇一七年一二月二一日（木）午後三時より
「中村研一『ことばと暴力――政治的なものとは何か』（北海道大学出版会、二〇一七年）をめぐって」

報告者　川　崎　　修
出席者　四十二名

一　体系

ハンナ・アレントは、暴力よりもことばを重視する思想家とされる。しかし、『革命について』では暴力への言及が少なくない。アレントは「生の政治的圏域においては言論（speech）が至上権をもっている」とする一方で、「暴力を犯さないではじまりはありえなかった」と記す。そして、「暴力は政治的領域においては限界現象（a marginal phenomenon）である」と述べる。著者も本書で、「政治的なもの」は「ことばと暴力が出会いせめぎ合う」、「臨界域」に生れるという。なぜ「ことばと暴力」か、その意味は何か。

ことばと暴力で政治を語ることは、マキアベリ、ホッブス、ウェーバー、ラスウェル、シュミットからアレントに至るまで、ある意味で正統的である。だが彼らは「暴力そのもの」を政治の内在的要素としては論じない。政治学にとって、暴力はむしろ「他人の領分」といえる。

それに対して本書の特色は、第一に、暴力関係の質・量の「厚さ」にある。これに関連して第二に、テロリズム関連の叙述が「過剰」なほど多い。国内・国際二元論を前提とする一般的な政治学原論においては、暴力の世界は国家が登場して終わるか、あるいは国家が主体となった次元で発生する。しかし本書では、国家の形態を構成しても暴力は収束せず、テロリズムにおいて国家と国家以外のものが同等に闘争する。さらに第三に、現代の政治学原論は規範的な結論にまとめられることが多いが、本書は「暴力」に始まり「ユートピア」で終わるという極めて異例な構成をとる。

二　各論

「政治学入門」の講義案をもとにするため、本書の内容にはオーソドックスな事柄が多い。ただそのなかでも、著者のメッセージは明瞭に打ち出されている。「第Ⅰ部 人間文化の問題性」では、「人間文化の否定性」に焦点をあてつつも、その応答として「〈共存の努力〉という政治――人間文化の一つの傾向性」が呼び起こされる。暴力は象徴によって誘発され（第一章）、その対として、ことばのシステムも権力性を有する（第二章）。「第Ⅱ部 ことばと暴力の臨界域」では、各章の結論はすべて重なる。暴力をより少なくすること、それが政治の世界で努力として求められる、という明確な主張が示される。紛争は不可避であり、必ずしも悪とは限らない。しかし、それをいかに「制御」し「不可測性を管理」するか（第六章）。この「暴力の発動を最小限に封じ込めていく暴力のガバメンタリティこそ、政治の重要な課題」とされる（第七章）。当初国家によって使用されたテロリズムは、民間にも用いられ、技術と宣伝効果が優位となり、「見る人々」を意識したものへと変化する（第八章）。9・11事件を分析した「第Ⅲ部 暴力の劇場」では、この内実が詳論される。

「第Ⅳ部 統治の言語的構成」の「制度」（第一三章）・「儀礼」（第一四章）では、保守主義との親和性が窺われ、制定された秩序よりも「自発的秩序」が優位に置かれているようである。ことばによって定義された「主権」の目的は「アナーキーの回避」にあるとするが（第一五章）、それに従えば、国家に規範的中身を与えるものがいることになろう。しかし、最終章では、「国家の外部から」「ない場所」への想像力」によって、「統治のヴィジョン」が与えられてきたとする。むしろ「実現可能であること」が「ユートピア的思考を腐食させた」と述べられ、政治が、計画して実行することとは区別されている。

三　「第四章　共存――政治入門」について

政治の定義が検討された第四章は、本書のなかでも極めてメッセージ性が高い箇所である。著者によれば、政治学の特色は、唯一の解や第一原理がないことであり、「答えではなく、問いを発すること」が重要である。

著者の分析の特色は、第一に、政治と非政治の定義にこだわり、秩序や価値配分では済まされない、特殊な営みとしての政治を位置づけていることにあらわれる。第二に、人間の複数性と可変性を前提として「共存する努力」を「政治」と定義し、その認識にもとづいて「反政治」が区別される。そこには、一般的認識における一貫性への高い評価にも拘わらず、政治はむ

しろ予測がつかずブレるものであるという主張や、他者が他者でいることを承認し、その他者の存在を拒絶することは政治的な営みとは言えないという主張も含まれている。この偶発性・偶然性の強調は、第三に、偶然性の極みであり暴力を誘発するアナーキーと、全体主義の極限でもある完全秩序との、「間」という、興味深い問題にもつながっている。

四　質問

このように整理した議論のうち、改めて問い直したい論点が三つある。第一に、政治における暴力の「臨界」性について、すなわち暴力は政治の内部か外部かという問題がある。冒頭に引いたアレントの師であるヤスパースは、「限界状況」の最たるものを死とした。死は生の否定であるが、人間の生は死を前提にしなければ考えられない。その意味で、生は死の内側にあるとも言える。「ことばと暴力」の「臨界」性は、この生と死の対比とは異なる意味合いをもつのか。第二に、テロリズムの政治的意味づけについて、本書がそれを強調するのは、現代世界の問題であるためか、それとも近代国家・主権国家以降の暴力問題の核心と認識するためなのか。第三に、ユートピアの評価である。暴力を制御・縮減し「より少ない悪」という「リアリズム」の側面と、ユートピア的想像力の肯定という理想主義の側面、この両者の関係は、どのように位置づけられるのか。完全秩序を否定し偶然性を評価するアレントの政治観と、プラトンのようなユートピア構想の探究は両立するのか。また、計画や政策的なものを重ねても、政治にはならないということを含意しているのか。さらに、「主権」はからっぽであるとの議論を踏まえると、政治体制は内在的に正当化されないのか。「統治のヴィジョン」は「国家の外部」に必要なのか。

以上の書評報告をうけて、当日の質疑応答においてはとくに第一の論点が検討された。そもそも暴力は政治の外側にあるのではないか、それを曖昧化して「臨界点」という物理学的な表現を用いることは誤解を招きかねないとの出席者からの批判に、著者自身が自説で応え、本書の特徴が一層鮮明になった。

（文責　眞壁　仁）